

みんなの
ための
学校長会に

茨城県 学校長会広報

第239号

発行者
茨城県学校長会
会長 小島 睦
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933-1
教育プラザいばらき内
☎ 029-269-1300
FAX 029-269-1304

特集

特色ある学校経営 行財政・調査研究委員会の要望や取組 先輩と語る会



目次

- 表紙写真に寄せて…………… 1
- (特集1) 特色ある学校経営…………… 2
- (特集2) 行財政・調査研究委員会
の要望や取組…………… 6
- 課題「チーム学校」構築の
ために今できること…………… 7
- (特集3) 先輩と語る会…………… 8
- 経営研究「創意工夫を生かした
特色ある教育課程」…………… 11
- 市町村教育委員会と
学校長会…………… 13
- 特別寄稿「社会全体で
子供を育てる」…………… 14
- 梅のかおり…………… 15
- ひばり…………… 17

日々感謝の心で

日立・多賀中

塚本 秀樹

本校の生徒は「笑顔」いっぱい「本気」で取り組む「凛」とした多賀中生」を合言葉に学校生活を送っています。

昨年の熊本地震の際には、生徒会を中心に「自分たちにできることは何か」を考え、翌月にはチャリティーコンサートを実施し、集まった義援金を赤十字を通して熊本に送ることができました。本年度の生徒会もこれを引き継いでくれています。

これからも、日々感謝の心で、体育館に響き渡る全力校歌斉唱と全力清掃を行う多賀中生であることを願っています。

特集 1

特色ある学校経営

地域の特性を生かした活力ある

学校づくりを目指して

―地域の自然や産業、人材の活用を図る―

一 はじめに

平磯小は、ひたちなか市の東端に位置し、学区は太平洋に面している。海岸線には、「くじらの大ちゃん」で有名な平磯海水浴場や、鋸歯状を呈した中生代白亜紀層が見られ、春から夏にかけては、磯遊びや海水浴客で賑わっている。また、海岸沿いの街並みには、古い漁師町の佇まいを残しながらも、内陸部の高台は、全国一となった市の特産品「干し芋」の生産地となっている。

現在、児童数は二一六名、八学級（特支一学級を含む）である。「義理の平磯」と言われる通り、保護者や地域の方々の学校に対する愛着は深く、自治会の主催する敬老会では、高齢者の方々が、校歌を児童と共に合唱し、毎年、懐かしい思いに浸るのも恒例となっている。

こうした保護者、地域の方の深い思いを受けて、本校では、「平磯」の街に誇りと愛着を

ひたちなか・平磯小 大内 良彦

もって、地域とともに生きる、心豊かな児童の育成を目指して、日々の教育活動に取り組んでいる。

二 地域の特性を生かした取組

本校では、地理的特性や地域の方の平磯への思いや専門性を生かした取組を行っている。

ア 地域素材の活用

○平磯海岸での磯遊び

五〇年以上続く伝統的行事で、児童にとって身近な海を大切にする心情を育てる目的で、毎年初夏に実施されている。縦割りで行い、上級生が下級生を見守りながら、潮の引いた岩場の水たまりでカニやヒトデを捕まえたり、小魚を観察したりしている。

○海岸清掃

毎年、平磯海岸の清掃活動に取り組み、平成二六年には、海洋環境保全の功績により、国土交通大臣表彰を受けた。

○水産加工場見学

三年生は、平磯町の特産品の一つである「タコ」の水産加工場見学を行っている。

○干し芋づくり

複数の学年で、サツマイモを栽培し、地域の方を講師に、冬場に甘くておいしい干し芋づくりを行っている。

○伝統文化継承活動

平磯の浜辺で生まれた「網のし唄」などの唄と踊り、お囃子をクラブ活動で練習し、地元の伝統を継承している。

○漆線を使った附属小との交流

二年生は、ひたちなか海浜鉄道漆線を使って、茨大附属小の児童との相互交流活動を行っている。

イ 地域人材等の活用

○昔遊びの会

一年生は、地域の高齢者の方々のご協力により、あやとり、お手玉等の昔遊びを教わり、地域の方との相互交流を深めている。

○菊づくり

ひたちなか市で長年に

渡って続いてきた菊づくりを、地域の方を講師に、三年生が行っている。

三 おらが自慢の学校

平成三三年四月には、本校を含む近隣の五つの小中学校が統合し、新たな学校が創設されることになっている。現在、地域の特性等を生かした新たな学校の整備計画が、市教育委員会を中心に進められている。統合に向けた各校の連携も始まっている。

残された期間は三年余りであるが、本校が児童や保護者はもとより、地域の方に親しまれ、「おらが自慢の学校」と、心の拠り所となるよう今後も地域に根ざした教育活動を進めたい。



かしこく 心ゆたかで たくましい児童の育成を目指して

高萩・高萩小 落合 武

高萩市の中心部に位置し、市街と太平洋を一望する緑に囲まれた高台にある高萩小学校は、創立一四三年を迎える歴史と伝統のある学校である。児童数は三二四名、一四学級（特支三学級含）である。児童は明るく素直で伸び伸びと生活している。

本校教育目標「かしこく心ゆたかで たくましい児童の育成」の具現化と児童にとって明日が待たれる魅力ある学校を目指し、知徳体の調和のとれた教育活動を推進している。本校は昨年度より「体育大好き推進事業」拠点校に、今年度からは県生涯学習課から「学校図書館支援事業」のモデル校に指定された。また、本市の「いきいき秋つ子育成事業」を活用し、「特別な教科 道徳」に向けた校内研修にも取り組んでいる。

一 学力向上に向けた取組

(一) 校内授業研究会の充実

授業改善の視点として、主体的・対話的で深い学びを引き出す授業づくりを掲げ、算数科で一人一人研究授業の体制で授業力向上に取り組んでいる。学習指導案を低・中・高学年ブロックで協働立案し、相

互参観とワークショップ型の研究協議を行い、授業改善を図っている。

(二) 学力の定着を図る個に応じた多様な指導方法の工夫改善

主体的な学習を促し、学習内容の定着を図るため、次のことに継続的に取り組んでいる。

○繰り返し学習の充実

○問題を解決する過程の重視

○ノート指導の充実と「学び名人ファイル」の活用

○TT、算数学習会での複数教員による個別指導の充実

○学力診断テスト分析結果に基づく「指導の重点」作成

二 豊かな心を育む取組

(一) 「平和の日」記念集会

本校の特色ある教育活動の一つである。平成八年三月八日に、長崎で被爆した柿の木から生まれた被爆柿の木二世が植樹された。この日を「平和の日」とし、毎年度、平和への願いや思いを一人一人の児童に深めるとともに、生命や人権を尊重する態度を育むために「平和の日」記念

集会を開催している。(二) 道徳の指導方法の工夫改善

役割演技、動作化などの疑似体験的な表現活動や問題解決型の授業展開を中心に校内研修会の充実を図っている。

○茨城大学小川哲哉教授を招聘しての校内研修会の実施

・講話 七月二日
・研究授業 一二月四日

○いじめをテーマにした問題解決型授業の実践
※文科省道徳アークイブHP

「いじめ防止を扱う実践事例」に掲載(小五)

○採用前研修公開研究授業 一月三一日

(二) ハートいっぱいコーナー設置

互いのよさをカードに記入し学級に常時掲示している。

(四) いじめノックアウトフォーラムと縦割り班活動の充実

(五) ボランティア活動の推進

三 体力向上に向けた取組

昨年度、体力テストのA+Bの割合が六七・六％で、一昨年度より約二三ポイントアップし、体力づくり奨励賞を受賞した。今年度もさらに六・五ポイントアップすることができた。

本校の課題として、投力に課題が見られるため、「体育

大好き推進事業」拠点校の二年目の取組として、体育大好き推進委員を先頭に投力アップチャレンジプランを推進している。

(一) 体育の授業での取組

○振り子投げの練習

○ゲーム的要素の工夫

・紙鉄砲ならし

・爆弾ゲーム

・ロケットボール投げ

○体育館への投てき板とロープスローの設置

(二) 普段の生活の中での取組

○ボールを使った縦割り班での集団遊びの奨励

○市子供会連合会主催のドッジビー大会への参加

今後、知徳体の調和のとれた教育活動を推進し、児童

ともに学び合う心豊かでたくましい 生徒の育成を目指して

銚田・旭中 清水 政信

旭中学校は、銚田市北部の農業を基盤とする地域に位置する学校である。昔からの住民がほとんどで、地域のつながりが深く、学校の教育活動に対して保護者も協力的である。

本校生徒は、元気なあいさつと礼儀正しい態度、清掃や部活動にひたむきに取り組む態度などがよき伝統として受け継がれている。この地域に自信と誇りを持ち、夢と希望を叶えようと努力する生徒を育てていきたいと考えている。

そのために、「主体的に学び合い、深め合う生徒」「豊かな情操を身に付け、互いを尊重し支え合う生徒」「心身共に健康で、勤労と責任を重んじる生徒」を目指す生徒像として取り組んでいる。

一 「育てたい生徒の資質・能力」の共有化

明確なゴールをもつことは、様々な教育活動の基本となる。そこで今年度は、「育てたい生徒の資質・能力」を教職員とともに作成した。確かな学力、



動作化を取り入れた道徳授業

にとつて明日が待たれる魅力ある学校づくりを目指してきたい。

豊かな心、健康体力、自己指導能力などについて、各学年や担当者で話し合い、具体的な姿を体系表にまとめたものである。育てたい資質・能力を共有しゴールを明確にすることで、教職員は同じ方向を向いて日々の教育活動に取り組んでいる。

今後は、地域や保護者の願いも取り込んでいきたい。

二 保幼小中の連携

今年度、本学区の保幼小中の学校長・園長が連携し、「保幼小中接続連絡協議会」を立ち上げた。本学区は四つの小学校と市立の保育園・幼稚園が一つずつある。幼児・児童・生徒の円滑な接続を目指すねらいがある。

今年度は、夏季休業中に全教職員・保育士が集まってプロット別に話し合い、一年間を見据えた教育を推進するための情報交換を行った。

本校も小学校の学びの広場や幼稚園行事へのボランティア派遣、小学校での朝のあいさつ運動、各小学校・園だよりの掲示などを行っているが、学習や生活面で統一すべき課題もある。今後よりよい接続ができるよう協議していく予定である。

三 教師の授業力向上

一日の中で一番長い時間を過ごす授業にこそ変わるチャンスがある。「主体的・対話的で深い学び」を目指し、授業改善に取り組んでいる。

(一)相互授業参観の充実

銚田市授業スタイルを基本にして授業改善を進めて

いる。

一人あたり年間二〜三回程度(合計四〇時間程度)を目安に授業公開と研究協議を行っている。参観した管理職からも助言・指導を行っている。

(二)先進校の授業参観

新たな気付きを求め、近隣の学校(市外含む)の授業公開に積極的な参加を促している。

参観する観点をもち、優れた授業実践を見ることで、授業改善に役立たせている。

(三)中堅・若手教員の育成

専門的な見地から授業力向上を図るため、研修センターの校内研修支援訪問を活用している。

今年度は、理科・社会で活用し、中堅・若手の指導力向上を図っている。また、日常的に管理職が授業参観し、授業について相談に乗ったり自信がもてるよう助言・指導したりしている。



四 地域学習の充実

本校の重要な地域学習として、一年生は農業体験、二年生は職場体験を行う「トライアルデー」を地域の農家や近隣の事業所の協力を得て、毎年実施している。

特に農業体験は地域の特徴やよさを実感する貴重な体験となつている。生徒は事前打合せから当日の体験とまとめまで、

誰もが生き生きと笑顔で登校できる学校づくり
分かる授業・楽しい学級

久賀小学校は、取手市の北端に位置する児童数二八〇名の学校である。「心身共に健康で 最後までやり遂げることのできる子供の育成」を教育目標に掲げ、学校・家庭・地域が「チーム久賀」として連携・協力する地域に根ざした学校である。

昨年度から『学力向上の基盤は学級経営』という経営哲学の下「誰も(児童も教職員も)が生き生きと笑顔で登校できる学校づくり」を目指している。組織目標には「確かな学力の習得と活用する力の育成」「自分よさが発揮できる学級・学年集団づくり」を挙げ、児童一人一人を大切にしたい『授業』と『学級経営』を重視している。指導に当たっては「分かる」

主体的に活動している。地域の農業経営者とふれ合い、農業の現実と将来について深く学ぶことで、視野を広げ、未来を考えるよい機会となっている。今後も、この旭中学校区の産業と人々の温かさに誇りと自信をもち、将来まで語りつないでいけるよう、地域・保護者と連携していきたい。



授業風景

取手・久賀小 堀本 恵美子

「丁寧」「連携」そして「ほめて伸ばす」を合い言葉に、職員は教育活動に取り組んでいる。

一 四つの重点施策プラン

目標達成に向けては、四つの重点施策に基づいて教育活動を展開している。

○学びあいプラン 授業改善を中核とした確かな学力を育む教育の推進

○ふれあいプラン 学級活動を中核とした人間関係づくりを大切にしたい豊かな心を育む教育の推進

○鍛えあいプラン 体育の授業や保健安全指導を中核とした継続を大切にしたい健康教育の推進

○磨きあいプラン 連携を大切にした特別支援や保幼小中高連携教育の推進

それぞれの具体的な取組状況は、学期毎に学校評価アンケート等の結果を基に「丁寧」に評価・改善しながら進めている。

二 委嘱研究で授業の改善を

一斉授業から脱却し、次期学習指導要領に示される「主体的・対話的で深い学び」を実践するためには、教師の意識改革と授業力向上が不可欠である。

本校は、取手市の研究委嘱を授業改善のチャンスと捉え「主体的な学びを促す算数科指導の在り方」へ児童がわくわくする問題提示の工夫を通して、をテーマに、二年間、授業研究を中心に研修を進めてきた。

委嘱研究の最大の成果は、全教科・領域でアクティブラーニングを意識した「分かる」授業が展開されるようになってきたことである。確実に先生方の授業力の向上が見られる。

三 意図的な取組で自尊心を

自分よさが発揮できる集団をつくるためには、児童一人一人の自尊心や自己肯定感を高めることが重要である。



芸大生による絵画指導

本校では、学級活動や縦割り活動等の中で、一人一人の活躍の場を意図的に設定している。「ほめて伸ばす」指導や成功体験や達成感を積み重ねること、社会的自尊感情を育むことがねらいである。また、保護者に「親子とも活動」（ともに食べ・遊び・働き・読み・学ぶ）を提唱している。親子の触れ合いを通して自尊感情の土台となる基礎的自尊感情を育んでもらうことをねらいとしている。

四 地域の専門家との連携で
専門的な知識をもった方の指導は、児童の学習を深め、興味や関心を広げる上で、非常に有効である。同時に、担任の指導力向上にもつながる。本校では、長年に渡り取手市在住の専門家と「連携」して様々な授業を行っている。東京学芸大学講師による「心の授業」では、六年間を通して命や自分らしく生きることの大切さを学ぶ。その他、東京芸術大学の講師や学生、書道家の先生、陸上クラブのコーチ、児童教育の教授などから、

発達段階に応じて継続的に学んでいる。様々な学びの場は、キャリア教育にもつながり、自分自身の未来を開ききつかけにもなると考える。

一人一人が輝く学校を目指して 目標の実現に向けて

共に学び合う教育活動を通して

猿島・猿島小 小林 晴美

境町立猿島小学校は、明治八年の開校から教え、一四二年の歴史をもつ学校である。創立時から地域の方々に支えられ、長い歴史と伝統のある「地域」ともにある学校」となっている。二〇二名の児童は、素直で明るく、六年生を中心としてあいさつ運動や校舎内外のクリーン活動に取り組むなど素晴らしい行動をとることができている。

学校教育目標「自ら進んで学習し 社会の変化に対応できる心豊かな児童を育てる」の実現に向けて、「自主・自立・協働」を学校経営の礎として、児童も教職員も自分の力を進んで発揮し、協働できるようにしている。日々の生活の中では「さしま」を合言葉に「さわやかあいさつ」「しっかり運動」「まじめに学習」できる知徳体のバランスのとれた児童の育成に、教職員一丸となって取り組んでいる。

○「さしま茶」全校茶摘み体験

今後、「全ての児童・職員が自分を前向きに捉え、学習や仕事に生き生きと笑顔で取り組める久賀小」を目指し尽力したい。

本校では、学区内にある石山製茶工場の協力により、全校茶摘み体験を実施している。「さしま茶」やその歴史についての理解を深めるとともに、地域の人々の「さしま茶」に対する熱い思いや絶え間ない努力について知ることができたいへん貴重な機会となっている。

体験活動は、縦割り班で実施している。上級生が下級生に優しく教えるなど、関わりを広げるとともに、自己有用感を高めることができている。

○さしまふれあいランドの実践
保護者、地域との連携により、地域の伝統文化の披露や昔遊び等の体験を通して、触れ合いを深め豊かな心を育んでいる。

・井草大杉囃子の演奏
・各地区ごとの児童及び保護者による模擬店の企画運営
・町民の会等地域の方々によるふれあい広場の企画運営

二 全教職員による授業づくり

○学び合いの授業展開
・グループやペアによる言語活動の工夫
・協働学習における教師の役割についての明確化
・思考力・表現力の向上を図る協働学習の設定

○パワーアップの学習

金曜日の六校時に「パワーアップ」の時間を設定し、補充学習や個別学習を実施することで、基礎的・基本的な学習内容の定着を図っている。

○外国語活動の推進

一年生から英語に慣れ親しむコミュニケーションを図ることができるよう、各学級一週間に一回英語活動を行っている。

三 豊かな心を育む教育の推進

○リーダー・イン・ミーの実践
「七つの習慣」の推進
自分に責任をもつことやゴールを決めてからはじめるなどの七つの習慣を普段の生活の中で実践できるようにしている。

・特別活動における授業
「七つの習慣」について教材を使って授業を行っている。
・リーダー宣言
あいさつ運動や下級生と遊ぶこと、クリーン作戦など計画を立てて実践している。

・一人一人のよさを可視化
一人一人のよさを認め合う掲示物を工夫して作成し自己有用感を得られるようにしている。

○読書活動の推進
・地域の方々による読み聞かせ
・読書賞の工夫
・新刊紹介コーナーの工夫
・県立図書館図書を活用
○人権教育の推進
「さしまっ子人権宣言」推進

「さしまっ子人権宣言」(元気にあいさつする、友達の話真剣に聞く、たくさんほめる、たくさんはげます、すぐに「ごめんね・ありがとう」を言う)を児童自身の手で制定することで、いじめゼロで、いつでもどこでも仲良く生活する意識を啓発している。

今後、児童、教職員一人一人が良さを進んで発揮し協力し合って共に向上していくことのできる学校づくりに努めていきたい。そのためにも、さらに地域との連携強化を図り「チーム猿島」を強固なものにした



全校茶摘み体験学習

特集 2

行財政・調査研究
委員会の要望や取組

平成三〇年度「教育行政に関する
要望」―その概要と経過―

〈要望の概要〉

詳細は要望書をご覧ください。

I 国への要望

○義務教育標準法の改正による教職員定数の改善

○多様な教育課題に対応するための加配定数の増

○小学校第二学年以降への『三五人学級』の拡充、早期実現

II 県への要望

「少人数指導教育」「教職員定数・教育環境等」に関する調査を継続実施するとともに、調査研究委員会及び教育研究会と連携して課題と情報を共有し分析と考察を行いました。

一 きめ細かで質の高い教育を子供たちに保障するために

(一)少人数学級並びに少人数指導にかかわること

①「楽しく学ぶ学級づくり事業(小一〜六)」の継続

②「中学校生活充実支援事業(中一・二)」の継続と

中三までの事業拡大

③「安定した学級・良好な人間関係・教師のきめ細かな指導」が可能となる少

行財政委員長 深見 晋

人数指導のための加配措置の拡充

④常勤・非常勤講師の確保

(二)確かな学力の育成にかかわること

①小学校における学びの広場サポートプラン事業の継続

②中学校における学びの広場サポートプラン事業の継続

(三)新学習指導要領の実施にかかわること

①「特別の教科 道徳」に関する資料・教材等の充実

②小学校における外国語及び外国語活動に関する研修の充実

③移行期間における教育課程編成に関する指導助言の充実

二 学校組織の充実と活性化を図るために

(一)新規採用にかかわること

①新規採用者の計画的・継続的な増員による小・中学校の欠員の最少化

②講師経験者の実績を十分に加味した採用枠の更なる拡大

(二)人事による活性化にかかわること

①学校の実態に応じた小学校専科指導加配教員の増員

②特別支援教育について専門性の高い教員の配置

③専門的・補助的スタッフの配置

④部活動指導員の配置促進

三 充実した教職生活の実現のために

(一)管理職の待遇改善にかかわること(省略)

(二)教職員の勤務時間の適正化と健康管理にかかわること

①勤務時間の適正化に関する共同研究の推進(省略)

(三)教職員の育成にかかわること(省略)

四 本県教育の一層の充実・発展を図るための市町村当局への助言について(省略)

〈要望書作成の経過〉

一 活動のねらい

本県学校教育の現状や直面している課題等の調査を通して、県学校長会が、その解決に向けた提言・活動等を行うための資料を提供するとともに、各学校の特色ある教育活動の推進の一助とする。

二 具体的な活動と進捗状況

三つの部会を設定し、次の四つの活動を行っている。

六月一日〜全小中学校への調査 I・II(県の教育情報ネットワークの活用)

六月二七日〜アンケート調査結果の集約、分析、考察

七月一三・一四日 県学校長会役員等との要望書内容の検討

七月二七日 常任評議員研修会で要望書案の説明

八月二日 要望書に関する前協議

八月二五日 県教育庁への要望書の提出

九月一三日 第二回評議員研修会で要望書への回答報告

調査研究委員長 佐藤 隆

(一)今日的課題に関する調査と研究(第一部会)

○教員の勤務実態(時間のみならず業務内容・意識等)に関する調査を抽出校を対象に実施し、行財政委員会と連携しながら、県への要望書作成、県との共同研究に資する。

○進捗状況

六月六日 協力校へ調査依頼

六月二六日 アンケート集約

課 題



「チーム学校」構築のため に今できること

県学校長会副会長 石崎 千恵子
(鉾田・鉾田南中)

中教審答申第一八五号では「チーム学校」が求められる背景の一つとして、学習指導、生徒指導等、我が国の教員は幅広い業務を担う中で高い成果を上げていくにもかかわらずさらなる充実が求められ、その一方で社会や経済の変化に伴い児童生徒や家庭、地域社会も変容し、生徒指導や特別支援教育に関わる課題が複雑化・多様化して、教員だけの対応では十分解決できないものが増えていることを挙げています。加えて、教員の勤務時間の適正化も、現在、大きな社会問題となっている。

答申は「チーム学校」を実現するための視点を三点示しているが、その中の「専門性に基づくチーム体制の構築」の視点について、「(学校が)今できること」を考えてみたい。

具体的には心理や福祉に関する専門スタッフの活用についてである。現在、本校では県や市の事業を受けて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを活用している。本校の大きな課題である不登校問題等対応については、週一程度来校するスクールカウンセラー(臨床心理士や大学教授等)の

なものとは何か、「精選」という視点を与えてくれる。

知的障害のある生徒や発達障害の可能性のある生徒等への指導については、特別支援学校との連携が有効である。様々な障害への対応に関する専門的な助言はもちろんだが、特別支援学校の指導方法は、学習指導や生徒指導はすべて一人一人の生徒の実態からスタートするという視点を再認識させてくれる。

答申では、心理や福祉の専門家や「学校の職員とする」ことを提案しているが、早期の実現はそう容易ではないだろう。しかし現在、県や市町村が実施している事業等を効果的に活用することによっても、外部専門家の活用による「チーム学校」の構築は可能である。ただ、そのためには、何より教員の課題意識、専門家から学ぼうとする柔軟な考え方や、そして生徒の小さな変容も見逃さない「生徒を見る目」が必要である。とりもなおさず、この「生徒を見る目」を磨くことが、生徒の小さな変容を見取ることができ、教員自身の「やりがい」と「学ぶ意欲」につながる。「チーム学校」の構築は、教員がこれまでの自分の実践と向き合い社会に開こうとする小さな勇気と、変えていこうとする柔軟性からスタートする。

七月 集計・考察

八月二五日 要望書提出

(二)特色ある教育活動の調査(第二部会)

○各小・中・義務教育学校の研究・研修の充実発展に資することを目的に調査を実施し、結果を「教育プラザいばらき」webページに掲載する。

○進捗状況

六月二二日 調査依頼

七月一四日 集約

七月 集計

八月 web ページ作成

九月一日 web ページ掲載

(三)勤務実態(時間)に関する調査(第三部会)

○年間二回(六月・十月)、全ての公立小・中・義務教育学校を対象に実施する。

○進捗状況

五月三〇日 調査依頼

七月七日 集約

八月 集計・考察

四全連小・全日中の調査及び編集等への協力

○全連小各種委員会の調査・標準法 ・施設設備教材等・教員養成 ・給与年金・教育改革 ・教育課程・現職教育 ・特別支援教育・健全育成

○全日中「全国中学研究校便覧」及び全連小「全国特色ある研究校便覧」の掲載校推薦

三 六月に実施した第二期中期

ビジョンに関する特別調査「教員の勤務に関するアンケート」結果から(一部抜粋して紹介)

県内の小学校・中学校各二〇校計四〇校の教諭約三二〇名を対象に実施した。

○日頃の勤務に「多忙感を感じる」が五〇・二%、「やや感じる」が四五・九%、合わせて約九六%が多忙感を持っていることがわかった。多忙感の主な要因は、小中とも学校行事、成績処理、事務・報告書、授業準備等であり、小学校で最も多かったのは学校行事であった。中学校ではこれら以外に部活動も多かった。

○定時出勤時刻より一時間以上前に出勤する者が五・八%、定時出勤時刻より一時間以上遅く出勤する者が八七・二%であった。

○平日、自宅に仕事を持ち帰る者は、平日が六七・〇%、土日が七四・三%であった。

○土日に学校で仕事をする者は、土曜日が七一・九%、日曜日が四六・二%であった。生の声として、行事の精選、校務支援システムの導入、部活動を減らす、教員を増やす、調査・報告書・作品募集を減らす、出張を減らす等が挙げられた。

特集3

先輩と語る会

八月三日
教育フーズいばらき

今年度は、一五名の先輩校長の皆様にご出席いただき、「次世代の教職員の育成」をテーマに、「教員志願者の養成について」並びに「現職教職員の育成について」の二つの視点から話し合いをしていただきました。



※ゴシックは先輩校長
【第一分散会】

▽「次世代の教職員の育成」について、教員志願者の養成と現職教職員の育成の視点から総合的にご意見をいただきたい。
○私が気になっているのは、先生方の仕事が大変になっていること

いるのではないかとということですが、それにより教員志望の学生に、先生の仕事に苦しいものとうつるのではないかと心配しています。

○私は、大量退職・採用の時代だからこそ、人材の育成が大切であると考えています。教員集団のような等質集団の特質は、目標に向かって力を合わせ研修をしていけば大きな力をつくり出せるところにあります。そういった力をつくり出せるような研修をお願いしたいと考えています。

○教師は、人間性で子供を教育しています。ですから教師には広く人間を見る目を育てたいところですが、例えば、校長も人間性を伝えるような講話を後輩にしていかなければ、後輩は育っていきません。教育の原点に返った研修を行い、人間性を高めていってほしいと思います。
○教師という職業が若い人たちにとって魅力ある職業として見られることが大切です。現在、大多数の先生方は、こんなんで



きるのかと思うくらい大量の仕事をごこなしています。身近なレベルの仕事から勤務状況の改善が必要だと思います。また、研修という視点で言えば、先を見据えて年代に応じた指導の場や適切な助言、さらには学校経営の中で役割を与え、人材を育てていくことが重要です。

○働き方改革によって、学校現場の現実が社会に少しずつ伝わり、改善に向けて動き出したのはよいと思っております。現職教職員の育成については、教育は信頼で成り立っており、学級経営力や授業力の向上が大事です。校長には、その支えとして、関係機関との連携や世論を味方にするような努力、一方的な考えに惑わされないように

することなどが必要だと思います。

▽現職の方から話をいただきました。

・昨年異動した教員から、先輩からのいろいろな話が役に立ったとの話を聞きました。私自身今まで教員としての仕事の魅力を語ることを、後輩にできたか反省させられました。
・若い感性を大切にしたり、ベテランのよさを若手に伝えることが、育成の秘訣であると考えています。

・人間性を磨くという話題が出ましたが、その大切さを感じています。
・業務において削れるところは削って、身近な勤務状況の改善が必要です。また、教師の人間性を磨くことで、ひいては「子供も磨かれる」という考え方を大事にしていくことが重要であると考えています。

・授業が成り立つように、基本を教えることが必要です。
・子供からの一言で、教員は元気になります。子供との人間関係づくりが未熟な教師の場合でも、校長等が関係づくりをバックアップしたりしていくことが大切だと感じています。

○大量退職に伴い、やはり今後が心配です。

・教員養成課程を受講する学生を増やしていかなければならないと思っております。そういった意味で「中学生の教員セミナー」などの施策は意味があると感じています。

○英語専科の教員を配置したり、四〇以下の悉皆研修だけでなく、五〇代ベテランにも目を向けた研修を拡大したりするなどの取組が必要だと思っております。

○単に学習指導ばかりではなく、人間性がいじみ出るような授業をする教員を、それぞれの立場で、アイデアを出し合って育成していきたいと考えています。

第一分散会

《先輩出席者》

- 吉田 仁様 日座 久隆様
- 鯨岡 武様 飯島 郁郎様
- 砂川 洋一様 田邊 一男様

《学校長会出席者》

- 小島 睦 石崎千恵子
- 茂木 悦男 沼田祐一郎
- 宮田 浩昭 深見 晋
- 和田 雅彦 内田 和子
- 久保智佳子

【第二分散会】

▽教員志願者が減少している現状を踏まえ、教員を志す優れた人材を増やすためには、どうしたらいいか、お聞かせください。

○教職に対する魅力をどう高めるかが大切になると思います。若い教員が学べる環境を整えないと、若い人が育たないのではないのでしょうか。また、教職への魅力も高まらないと思います。

○私たちから、若手教員の勤務の実態についてお聞きしたいです。

・本校の初任者二人は担任をしていますが、多くの時間を教材研究に費やしています。帰りは早いとは言えない状況です。

○講師が担任をしている場合も多いと聞いて心配です。

・補充等で講師が担任となることもありますが、初任者は研修等々の機会が十分とは言えない状況にあり、講師の先生自身も指導について悩んでいるのではないかと思います。

○講師は頑張って勤務していても、採用試験で不合格の場合もあります。本当に優秀な人が教員になれず、他の職業に就いてしまわないか心配です。

○若い先生が教職に魅力を感じ

る職場環境が必要です。部活動の指導が忙しく、若い先生が本来の仕事である授業や学級経営に力を割けないとしたら問題があると感じています。極端に言えば、部活動顧問は、条件付き採用期間は免除し、教員としての喜びや意欲を育てたいところです。

○現場の学校評価の結果を見てももう機会がありました。主体的に活動させたりする手立てを十分に講じたか。」についての評価が低調でした。改めて子供の意欲に関する視点が、教師には重要であると思います。その上で、教育現場の状況を社会や一般の人に理解してもらえようように、正しく伝えることが大切だと感じています。

○今後、大量退職となると、初任者や講師でも担任をしなければならなくなりそうです。若い教師をどう育てていくかは、校長の責務であり、忙しさに流されることなく、教師としての資質を学んでいってほしいと思います。

○校長会では、学校現場の実情を正確に行政に伝え改善を求めることも必要でしょう。子供一人一人のよりよい成長を目指すた

めには、担任をする講師には研修を用意し、初任者には担任をもたせ、責任と喜びを実感できるようにさせたいところです。

○学校現場についての様々な報道もあり、逆風の中はあるが、教員の魅力や素晴らしさを感じてもらうために、茨城大学では教育実習以外に、全学部の三年生を学校現場に派遣し、教員の仕事を体験させることを、本年度から取り組んでいます。教員の素晴らしさややりがいが生徒に伝わるとうよいと考えています。

○教員志願の学生は、小中で接した先生に啓発されて教職を目指すことが多くあります。先生の魅力が教える子にどう語れるかが大切です。校長は、初任者を育て、その初任者を見て、児童生徒が憧れるようになり、それがひいては志願者の増加につながります。

○教師の魅力を、一般社会に広く発信していくことも大切だと思います。

○外での研修ばかりではなく、職場の中で先輩との関わりなどを意識してつくることで、ベテランも若手も学び合うことができているのではないのでしょうか。

○教職員育成の面では、若手や

ベテランを含めて、教員同士の学び合いが少ないのではないかと感じています。教職員の育成には、教員同士の学び合いを増やすことが重要だと思います。

・一人一人の能力に頼るのではなく、チームや連帯意識が高い企業が伸びています。学校も同じです。

○その意味では、職場の雰囲気づくりが大切だと思います。

○研修だけでは、教員は育たないと思います。職員同士の関わりを通して、教員を育てるという視点も大切であると考えています。

▽現職の先生方は、どうでしょうか。

「あんな先生になりたい」と、児童生徒に憧れを抱かせることが、将来的には大事だと思います。ゆとりをもつことはなかなか難しいことですが、校長としては、少なくとも職員が前向きに仕事ができるように学校の経営を進める必要があります。

▽教員にやりがいをもたせることに関しては、どのような状況ででしょうか

・校内で自分の得意分野を披露し、先生方に伝える研修を実施



第二分散会	
《先輩出席者》	
大石 信雄様	中井川正次様
梅原 勤様	鈴木 一司様
東小川昌夫様	
《学校長会出席者》	
石川八千代	海老原治夫
吉井 由隆	井坂 庄衛
角谷 直人	飯島 誠
永田 博	大和田 栄
大川 洋子	會澤 順子

【第三分散会】

▽教員を志す優れた人材を増やすための現場の取組から、お話しください。

・職場体験では、教員希望は五年前より少なくなっています。魅力ある教師像をアピールしていくことが必要です。

・教員は、勤務時間が長く、社会からの要請も多いが、そのすばらしさを伝えて理解してもらおうことが必要だと考えています。若い学生が、やりがいを感じるようにすることが、我々の使命だと思います。

・講師の先生に、教師になりたい理由を聞くと「すばらしい恩師に会ったから。」と答えてくれました。教師のすばらしさを伝えていくことは大事だと感じました。

・小学校で、高校生のインターンシップや職業体験を受け入れています。小学校でも職業フォーラムを行っています。

○「先生に教わらなかつたら教員にはなっていないかった。」という教え子がいます。先生たちが、学力をいかに上げていくかを努力していけば、教員になりたい子が増えると思います。

・学びの広場で、高校生が生き生き

きとしながら、小学生に教える姿を見かけました。教えることによつて学ぶこともたくさんあります。卒業生である中学生が、リトルティーチャーとして小学生に教えるなど、小中高が連携することも必要だと思います。

○教員を目指す人が少なくなってきたのは、教員という仕事に魅力を感じられないからだろうと思います。世相の影響もあることでしょう。私は、校長として教員の資質を見極め、その人の良いところを伸ばそうと努めました。水戸市では、教育長自ら教員を目指す人を集めて、面接練習をしていると聞いています。水戸市のようにプロジェクトを組んでやることも大事であろうと思います。今の学生は、よく勉強しています。育ててあげないと教育界から離れてしまいます。

○教育長会議でも同じ悩みが話題となります。私は、まず先生が楽しく授業をやること、手本となるような魅力ある姿を子供たちに示すことが大事だと思っています。昭和四〇年に教員になった頃は、みんな前向きでした。私たちも、先生方が元気に授業をやるような素材や場の提供をしないといけないと思

っています。当時の先輩の中には、PTAの役員に道徳の授業を見せるなどの取組をする方もいました。また、主体的な学習を中学校でもやっており、先生方の中には、中学校に行つて授業を見てみようとする姿もありました。先生方に前向きさがあると、それが子供たちに伝わっていきます。先生方が楽しいと感じる雰囲気をつくりたいところです。「先生は大変」というイメージを改善しなければやる人がいなくなります。楽しくできることが大切なことです。

▽次世代のリーダーをどう育てていくかについては、どうでしょうか。

○中堅教職員を、ぜひ教職大学院に送つてほしいと思います。学校現場の課題を把握した上での取組をしているので、ミドルリーダーとしての力が着実につきま

す。現場は、人員配置、地域差、小中の年齢差など課題があります。ミドルリーダーも早めに育てていく意識が必要です。

・現状では、ミドルリーダーになる年齢層が少なく、また打たれ弱いという印象をもっています。褒めながら育てているというのが実感です。



○校長は五徳、つまり剛気(どんな問題が出てこようが怯まない)、忍耐、威厳(強さ)、誠意(まごころをもって接する)、勉強が必要。若手を育てるのは、校長の責任であり、適材適所とちよつとしたフォロワーが必要です。細かいことも指導しないと教員は成長しません。

○世の中が厳しくなっています。環境や周りが悪いと言っているのは先には進みません。信念をもつことが必要です。人は、すぐに役立つものを求めがちですが、じっくりと地味ではあるが、本質を求め続けることが大事だと思います。

○現役の校長時代、迷つた時には、学校の中、地域を歩きましょう。

た。するといろいろなアイデアが転がっています。また、様々な催しに行くことで、先生や生徒の姿が見えてくることもあります。他の学校に負けたくないという気持ちも出てきます。そして、それは、先生方にも伝わっていきます。



第三分散会

《先輩出席者》

中川 實様 鬼澤 明様
坂場 克身様 佐藤 和夫様

《学校長会出席者》

伴 敦夫 富永 保
額賀 隆 飯泉 雅司
中田 和彦 倉持 勝美
佐藤 隆 仲田 弘見
川崎 敏子

先輩の皆様の教育にかける思いがひしひしと伝わってまいりました。私も学校長会の会員一人一人が、今回皆様からいただきました貴重なご意見をしっかりと捉え、今後の学校経営に生かしていきたいと考えております。皆様には、今後ともご指導の程よろしくお願いたします。



創意工夫を生かした 特色ある教育課程

小中一貫教育

「自らの人生を切り拓く、たくましく生きる児童の育成」

那珂・ばら野学園菅谷西小 大川 洋子

那珂市は平成二七年度より児童生徒の発達段階に応じた系統的できめ細かな教育を推進するため、義務教育九年間を見通した小中一貫教育を行っている。中学校区を中心とした学園名を取り入れ、本校は第一中学校・五台小学校とともに「ばら野学園」に属する。各学園では特色に即した多様な取組を行い十一月の第二土曜日には「那珂市小中一貫教育の日」を設け、地域も巻き込んだ教育活動を行っている。学園と本校の両面から活動の一端を紹介する。

一 「ばら野学園」での取組

(一)学習指導・生徒指導

一年生から九年生までの連続した学びを意識しながら、各学校の規律等を精査し「学びのスタイル・生活のきまり・約束事」にまとめ、発達段階に応じた学び方を育成している。

また、今年度は研究推進校として学力の向上を目指した取組の成果を、十一月二日に三校合同の「ばら野学園」の

研究発表会で公開する予定である。

- 学校行事等の連携・交流
- 体育祭の参加や部活動体験
- 合同校外学習（小小連携）
- PTAの合同行事等

このような行事を通して交流を深めることで、児童の中学校への不安が軽減されるばかりでなく、保護者の戸惑いの軽減にもつながっている。また、保幼小連携や地域との関わり等も計画されている。



二 本校の取組

「自他のよさを認め合い、自分のよさを鍛え発揮する場を設定し自己肯定感を高める」ために、次の取組を行っている。

- (一)対話力を鍛える
朝の短時間学習の時間に「話合いの時間」を特設し、表現力の基礎を学び、対話力のスキルアップを目指している。
- (二)ICTの効果的な活用
ICT機器を比較検討や共有

豊かな自然と小規模校の特色を 生かした小中一貫教育

日立・中里小・中 鈴木 克彦

本校は、日立市の北西部に位置し、周りを豊かな自然に囲まれた地域にある。平成二三年度から施設分離型小中一貫校として、小中一貫教育が開始された。

本年度は、児童数が二五名、生徒数が二一名と小さな学校であるが、それを補う特色もある。その一端を紹介する。

一 「コミュニケーション科」

平成二三年度に文部科学省から教育課程特例校の指定を受け、コミュニケーション科をスタートさせた。コミュニケーション科には「英語」と「ことば」の二領域があり、小学校では、一年生から毎週一時間「英語」を学習している。「ことば」は、年間に一〇時間程度で、低学年は昔話を、中・高学年は落語を

有場面で取り入れ、児童の主体的・協働的な学びを目指している。

(三)高学年における教科担任制教師の専門性を生かし、多くの教科で実施し学力の向上を目指している。多数の目での関わりは生徒指導上も効果的である。
このような教育活動を通してたくましい児童の育成を図りたい。

学んでいる。中学校では、「英語」は、ALTを中心に、聞く・話すのオールイングリッシュ形式で授業が進む。「ことば」では、能楽を学んでいる。

二 乗り入れ授業による専門的な指導

本校は、小・中両校の教員に兼務発令されているので、中学校の教員が小学校で教科の専門性を生かした授業をしている。
・小学六年生に、理科、算数はT2として
・小学五・六年生に、コミュニケーション科・英語のT2として

・小学三～六年生に、音楽、図工、体育

三 小規模特認校制度

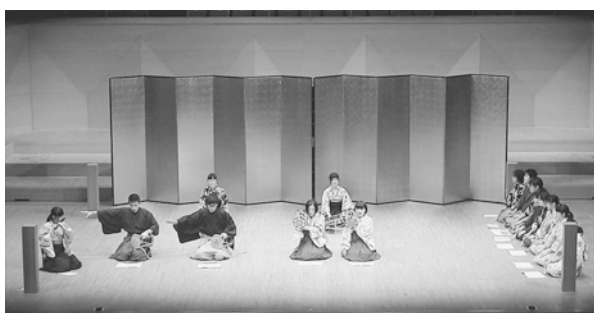
児童生徒数の減少により、平

成二五年度から小規模特認校制度が開始された。これは、市内全域から通学できる制度であり、そのために、スクールバスを運行している。

四 小・中合同行事

- 小中一貫校として、多くの小・中合同行事や地域と一緒に文化行事が行われている。
- ・合同新任式・始業式
- ・中里学区合同体育祭
- ・中里学区合同文化祭
- ・地域合同防災訓練
- ・中里地区敬老会
- ・小学生の部活動参加
- ・りんごの摘果・収穫
- ・合同修了式

これらの取組を通して、児童生徒の健やかな成長を図ってきたい。



家庭・地域・専門スタッフとの協働による 児童の自主性を育む教育活動の展開

北相馬・布川小 仲田 義弘

本校は、利根町の南部に位置し、旧布川小と太子堂小が統合し、今年度、創立一〇周年を迎える。児童数は二五八名で恵まれた環境の中でのびのびと明るく学校生活を送っている。一方では、学習面や生活面で配慮を要する児童も多く、家庭・地域・専門スタッフとの協働による支援体制が課題となっている。

一 家庭や地域・専門スタッフと協働した教育活動の展開

(一) PTAとの協働による児童が主役の創立一〇周年記念事業

○ PTAが中心となつて編成された実行委員会が記念スローガン・キャラクター募集を行った。

○ 高学年児童が学級会で作品を一点ずつ選び、代表児童が全校集会でプレゼンを行い、全校児童で総選挙を行った。

(二) 地域との協働による児童が主体的に学ぶ安全教育

① 児童と校内パトロール隊による校内安全マップの作成

○ 保健安全委員会の児童が地域ボランティアの校内巡視パトロール隊の助言を受けながら、校庭・校舎内の

危険箇所を歩いて探し、記録をとり、それをもとに、校内安全マップを作成し、保健安全集会で発表した。

② 児童と登下校見守りボランティアによる通学路の点検

○ 三年生児童が登下校見守りボランティアと一緒に通学路を歩き、危険箇所を白地図にチェックしたり、理由を考えたり、ボランティアの助言を受けたりしながら活動した。

○ 通学路安全シートに危険箇所と理由を書き込み、登校班集会の時に全校児童の前で発表し、自分たちで相互に気を付け合うように呼びかけた。

(三) 専門スタッフとの協働によるカウンセリングマインド



を取り入れた授業
○ 本校に派遣されているスクールカウンセラーの協力で、カウンセリングマインドを取り入れた授業を各学年で展開している。配慮を要する児童の授業での生かし方なども助言を受けている。

地域のよさを実感できる 教育活動の工夫

桜川・紫尾小 鶴見 正

本校は、桜川市の南端に位置し、名峰筑波山の麓にある小規模校である。校内を自然の川が流れ、休み時間には学年を超えて仲良く魚とりをして遊ぶ子どもたちの姿が見られる。

また、平成三〇年三月をもつて閉校となり、真壁小と桃山中と統合し、県西地区初の義務教育学校となる。現在の校名での最後の一年となるため、日々の教育活動の充実に努めている。

一 具体的な取組

(一) 地域のよさを実感できる活動
地域の教育資源を積極的に活用し、地域の人々との交流・地域の自然に触れる体験活動をとおして、地域のよさや人々の思いを実感できるように、工夫している。

○ 稲作体験
今年度は、閉校記念行事に

二 成果と今後の課題
家庭・地域・専門スタッフとの協働により、児童が自分のよさを発揮できる場面が多く見られるようになった。今後は「社会に開かれた教育課程」を見据えて、しっかりと見直しを図っていききたい。

活用したいと考え、もち米の栽培に取り組んでいる。地域の方を講師として招き、全児童が参加して、田植えと稲刈りを体験することができた。

○ 地元のみかんづくりの教材化学区には、地形を生かしてみかんを栽培している農家がある。三年生の社会科で取り扱うようにした。地域のよさや農家の人々の思いを知るよい機会となっている。

○ 校内持久走大会
本校では、地域の自然に触れる機会を設けたいと考え、つくし湖周辺の道路をコースに持久走大会を実施している。

(二) 外部機関との連携
専門的な知識や技能を身に付けた方々との交流は、児童の興味関心を高め、新たな学

ぶへの意欲付けとなる。
○ アユのつかみどり
校内を流れる川をせき止め、毎年実施している。魚を素手でつかみとる体験は、忘れられない思い出になっている。

○ 門松づくり・もちつき
地域の方々が講師となり、毎年十二月に実施している。正月を迎える準備を体験できる貴重な体験の場となっている。

二 成果と課題

これまでの取組により、地域のよさに気付いたり、人々の思いを感じたりすることができたようである。夏休みの作品にも、地域の歴史や行事を題材にしたものが多く見られた。

今後も教育資源を生かし、地域を大切にしよとすると心を育てるとともに、地域を担う人材の育成に努めていきたい。



市町村教育委員会と学校長会

中央 東海村教育委員会との連携

那珂郡・東海南中
飛田 順一

東海村校長会は小学校六校、中学校二校の計八校で構成されている。

本村校長会は毎月定例の校長研修会を開催し、教育課題解決のために話し合うとともに、各校の取組などの情報交換を行っている。また教育委員会からは教育長や学校教育課長、教育委員会指導室長が毎回同席し助言指導をいただくとともに村の教育的行事や施策の確認、各種情報を提供いただいている。

本村では、二〇一六年に「東海村教育振興基本計画―東海教育プラン二〇二〇―」の後期計画を策定し、二〇二〇年までの五年間の重点事項を明らかにした。その二年目である本年度は「子どもたちの自己有用感を育む教育」を重点目標とし、教育委員会と連携しながら各学校で、それぞれの課題を明確にして教育活動に取り組んでいる。ここでは、児童生徒の自己有用感を高め、自己実現を図るために、教育委員会と校長会が連携・協力して進めている学力向上策について述べてみたい。

本村では教育委員会と村教育研究会及び村校長会が連携し、学校運営推進委員会を組織している。ここでは県学力診断テスト及び全国学力・学習状況調査の分析を通して児童・生徒の実態の把握と授業改善のための具体的施策の立案と実施を行っている。

また、本村独自の教育展開として少人数級編成があげられる。小学校第一、二学年の学級編成を三〇人以下とし、きめの細かい指導・支援を行っている。不足する教職員を村が任用し、平成二九年度は小学校三校に四名が配属されている。また、スタデイ・サポーター（学習支援員）を小学校六校に計七名、中学校二校に計一〇名配置し、一人一人の実態に応じた支援を行っている。さらに、理科、美術、ICT分野の専門的な知識・技能を有する講師（教科特別指導員）を配置し、小学校各校に派遣することでより専門的な深い学びを実現している。

英語教育では英語指導助

手（NLT）を全校に常時配置するとともに、平成二三年度より教育課程特例校指定を受け、小学校一年より英語の授業を行っている。さらに小学校六年生代表児童による村小学生インタラクティブフォーラムを開催している。このような取組を通して小学校一年生からネイティブな英語に慣れ親しむことで、コミュニケーション能力を育成している。

また、国際理解教育を推進しながら中学校での実践的な英語力の伸長に繋げている。

最後に、今後も教育委員会との連携をさらに深めながら、児童生徒の健全育成のため学校経営に取り組みでいきたい。

北 日上市教育委員会との密なる連携について

日立・会瀬小
矢板 久

日立市の学校長会は、小学校二五校、中学校一五校、特別支援学校一校の計四一校で構成されている。学校長会は、年九回

の定例会と三回の三部会（南・中・北部会）を開催し、教育課題解決のための研修会や協議、各校の取組について情報交換等を行っている。特に定例会では、教育研究会協議員会議や小中部会別会議を実施し、当面する課題や行事等についての確認を行いながら、より実効性のある組織を目指している。

市教育委員会とは、教育効果をより高めるための事業等の実施に向けて、以下に示すような連携を図り進めている。

一 学校長・園長連絡会議

年に二回（四月・一月）市教育委員会主催で開催される。特に年度初めは、教育長や教育委員をはじめ、互いの自己紹介から始まり、市教育委員会各課より年間の主な事業の説明や報告がなされ、それに対する学校長・園長側からの質疑や意見等を交換している。市内の教育関係者の代表が一堂に集まり、市としての考え方や今後の流れ、方向性についての情報や事業内容を共有化する意味では、大変有意義な会議である。

二 学校運営協議会の推進

本市では、各学区におけるコミュニティ活動が盛んであり、その組織を生かして、質の高い学校教育の実現や地域の教育力の向上を目指して学校運営協議会制度の導入が始まった。一昨

年度から市教育委員会主催で、本制度についての専門家からの講演や、実際に運用を進めている地域のCSマイスターとの研修会等を実施してきた。今年度は、モデル校を小・中二校指定し、その有効性や課題について検証を進めている。

三 校務支援システムの導入

今年度、児童生徒の個々に応じたきめ細かな教育の充実と、校務の効率化を図るために、校務支援システムが導入される。児童生徒の学習や生活に関する情報の集約と共有化と、教員一人一人の校務の効率化を図ることで、児童生徒に向き合える時間の増加や教材研究や授業準備の時間を確保しやすくなる。

この他の連携として、学校長会定例会開始前の市教育委員会等からの連絡の場の設定、次年度に向けた「学校教育に関する協議書」を基にした市教育委員会との協議会、校長が充て職（代表）で参加する各種委員会等がある。

日上市学校長会は、「日上市学校教育振興プラン」の中の合言葉「いいとこ発見 夢づくり」を常に念頭に置きつつ、市教育委員会との更なる連携を図っていきたくと考えている。



特別寄稿



社会全体で子供を育てる

高萩市教育委員会 教育長 小沼 公道

学習指導要領が改訂された。今回の改訂を一言でいえば「社会に開かれた指導要領」であり、急激な変化をし続ける社会の中で学校が地域社会と積極的に連携・協働することの重要性について言及している。さて、その地域との連携・協働とは一体何だろう。私には一生忘れることのできない経験がある。ある日の帰り道、コンビニに寄った。中には、見覚えのある店員がいた。間違いない教え子だった。その子は、「場面緘黙」だった。小学三年の時、『変な声』と友達に言われたことから、まったく話さなくなった。

彼女が六年生となり、私が担任することになった。『必ず治す』と自信をもって取り組んだが、結局一度も声を聞くことができず卒業させてしまった。店に入った瞬間、彼女の表情が変わった。私は気が付かないふりをし、レジに品物を差し出した。「八六五円です。」と、弾んだ声。初めて聞いた声に、私は思わず涙がこぼれた。お釣りを渡す彼女の手が震えている。「ありがとうございます。ありがとうございます。」の彼女の声に、何も答えることができず、私は店を後にした。ドア越しに見る彼女は、レジの前で泣いていた。

子供の心や未来を拓くのは学校教育だけでは難しい。子供の人生の中で様々な人が関わりをもち、自分がかけがえない存在であると実感したとき、子供たちはすばらしい力を発揮する。そもそも人は、産まれてくるとき手を握っている。右手に夢、左手に希望を握っているのだ。大きくなるにつれ、握っている手を開いていく。その手からこぼれ落ちた夢や希望を、成長とともに懸命に追い求めて生きている。その途中で不安になると、そっと手を差し伸ばしてくる。握り返す手は両親であったり、友達であったり先生であったり。その時、どう握り返すのだろうか。学校と家庭、そして地域が、いつも子供たちを見守り、育てることが、握りしめてきた夢と希望を叶える力となる信じ、高萩の教育に携わっている。

「死ぬほど読書」というタイトルをみて、「死ぬほど？」に驚き読みたくなった。著者は男子学生の新聞の投書の「読書はしないといけないものなのか。」という問いに疑問をもった。私自身も子供たちに読書を推奨しているが、「しないといけないものなのか。」と尋ねられると納得のいくように回答できるだろうか迷った。きっとこの本を読むことで読書の必要性を教えることができると思え読み始めてみた。

読んでみませんか

「死ぬほど読書」

著書 丹羽宇一郎
発行所 幻冬舎
下妻・大形小 宮田 真理子

著者が伊藤忠商事の社長時代大きな問題に直面した時、力となったものは読書と経験だった。「特に多くの本を読んだ人は、先人たちの知識や経験からいろいろな学ぶことよって、突破口を開く気づきや心の強さを得られる。問題をあらゆる角度から眺め、あらゆる可能性を探るには、読書で得た知識や考え、想像力といったものが大きな力となる。」
子供たちに話す材料として読んだ本書であったが、人として、経営者として私が必要なことを学ぶ事ができた。
「本を読んでいて一つでも心に刻まれるものがあれば儲けもの」と述べている。また、読み方のコツとして「線を引いてノートに書き写す。」とあった。これを読み、この本に線を引いて読んだ。本をもっと読んでみよう私の意欲をかき立てた本であった。

梅のかおり

—先輩校長から—



『相談力』で学校は磨かれる



前・那珂市立五台小学校長 加倉井 正

適応指導教室で子供たちと接していると、学校の先生の姿が子供の表情を通して鮮明に伝わってくる。放課後登校した子に毎回全力で取り組む先生や夜遅くまで家庭訪問する先生方の奮闘に頭が下がる。

にも関わらず、その情熱が子供や親にうまく伝わらないケースも少なくない。教師のなにげない一言やしぐさがきっかけで関係が切れてしまうことがある。親切心から担任が話したことが、子供や親にぐさりと刺さっているのである。一度こじれると関係の修復がとても困難となる。

解決のカギは教師の「相談力」にある。「相談力」は三つの力の総合体である。一つは子供や親が何を考え何に困り、何をしたいのかを捉える「理解力」であり、二つは「どんな子供や親もよくなりたいと思っている。」という「成長への意欲を信じ切る力」であり、三つは、子供の心に能動的に寄り添う力、自己を開いて同僚に助けを求める力などの「実行力」である。

高所から眺めても木の根の状態は見えない。声なき声に耳を傾け共に歩む生きざまが学校の活性化に繋がると信じている。

人とのつながり



前・小美玉市立北山小学校長 大山 徳

光陰矢の如しといいますが、定年退職して半年が過ぎようとしています。

退職の辞令を受け取ったとき三八年間の教職を無事終えることができた安堵感と教職を去ることへの寂しさが交錯していました。それは多くの上司や先輩、同僚、そして応援していただいた保護者や地域の方々のお陰と

心より感謝申し上げます。

さて、四月から幼稚園に勤務することになり、新たな職員、園児、保護者等との出会いがありました。そこには、お互いの信頼関係やつながりが求められます。

また、教え子たちによる退職祝いには感謝の気持ちでいっぱいです。さらには、先輩や旧友、現職の校長先生等からゴルフのお誘いがあり楽しんでいきます。そこには多くの思い出話があったり、現在の生活や健康面、趣味などの話になったり話題がつきません。

これからの人生、人とのつながりを大切に歩んでいきたいと思っています。

退職して思うこと



前・日立市立滑川中学校長 大友 正徳

三月に教職生活を無事終え定年退職することができました。在職中は、会員の皆様には大変お世話になりました。

職を退いてから半年ほどが過ぎてしまいました。嘸かし自由な時間が作れると思いきやそれほ

どでもないなと感じております。

思うに、今までは何も考えずに日々の勤務だけに集中をしておけばよかった生活が、日々変化する社会情勢に殊の外敏感になったり、自分の老後の生活設計に悩んだりと現実を知られば知るほど不透明な将来にいらぬ不安を覚えてしまうことがあります。

さらに、今までは病気知らずだった家族や親族の中に一人また一人と健康を害す者が現れるといったことも不安を助長しているのかもしれない。

何れにしても現実を受け入れ、その中で自分ができることは何かを見つけていることが、今までお世話になった多くの方々への恩返しになるのではないかと思っています。

最後になりましたが、茨城県学校長会の益々の発展と会員の皆様のご活躍をお祈りいたします。

共に育つ



前・鉾田市立北小中学校長 菅 弘史

教員生活をスタートして間も

なく、先輩から「共に育つ」との大切さを教えていただいた。この言葉と実践での学びが、今でも私の道標になっている。

教員生活最後の勤務校は五つの小学校が統合した開校一年目の学校であった。統合推進委員会にも関わらせていただき、関係小中学校で役割分担・協力して統合推進を図った。閉校と開校が同時進行した時もあった。

統合初年度の学校経営では、「できない理由を探すのではなく、できる方策を探っていく」と合言葉に困難を乗り越え、喜びを分かち合いながら進めることができた。関係各位の皆様のお陰で基礎づくりを成し遂げ、職員や地域と共に育つてこれたことに心から感謝するとともに今後の更なる発展を祈っている。

現在、地元にある社会教育施設の指導員となり半年が過ぎた。「教えることは学ぶこと」といわれるとおり一般社会人や幼児・児童・生徒を相手に今でも日々学びの連続である。

先日、同僚と尾瀬トレッキングをした。今後も時間を有効に活用して視野を広げていくとともに、腹心の友や共に育つ仲間との交流も深めていきたい。



褒めて育てる



前・龍ヶ崎市立
長山中学校長
島田 文雄

多くの先輩や同僚・後輩の先生方に支えられ、三七年間の教員生活を終了し無事退職の日を迎えることができました。お世話いただいた先生方への感謝の気持ちで一杯です。

退職後は、学校現場からは一線を引こうと考えていたが、教育長先生のご配慮により現在は初任者研修の拠点校指導員として週四日、日替わりで四人の初任者の先生たちと日々生活を共にしています。

退職して早五か月が経過し、若いエネルギーを貰いながら現役の時から信条としている「褒めて育てる」の精神で初任者の授業を日々拝見し、言動の良い点に着目して指導にあたっています。教員は、児童生徒の欠点を指摘する指導では児童生徒の成長を助けるのには限界があると聞いたことがあります。そんな時、龍ヶ崎にある相撲の式部屋の親方は、弟子を褒めて伸ばす指導に専念し成果を上げていくとの話を聞き、褒められて

いやな思いをする人もいないだろうとその指導方法に賛同し、継続しています。

今後、「褒めて育てる」の精神で、責任とやりがいを持ち、初任者の指導に全力であたっていきたいと考えています。

「一通の手紙」から



前・取手市立
第一中学校長
戸部 明彦

今から四年前、一通の手紙が自宅に届いた。差出人は、三〇年前当時、中学二年生であった教え子。その内容は、クラス会開催の案内であった。記憶にある名前ではあるが、卒業アルバムでも十分な確信がもてず、しばらくは、連絡を躊躇していた。

数週間後、手紙の内容について電話で確認。その時初めて、クラス会開催の経緯について知らされた。昭和五七年当時は、生徒の急増による学校分離の時代。担任していたクラスも三年進級時には、二つの学校に別れなければならなかった。その後は、それぞれの学校を卒業することになるが、分離前の同じ学校で過ごした二年間に、特別な感情をもっていたようである。

そしてその年の夏、教え子たちとの約三〇年ぶりの再会。一人前の社会人として、立派に成長していたその姿に、大きな感動を抱きながら、過去の記憶を必死にたどっている自分があった。

退職してから半年。これまでの教職生活について、じっくりと振り返る余裕はまだない。これまでの重責などから解放され、少しずつではあるが、時間と心の余裕などができつつある。これからは、自身の目標をしっかりととって、より充実した人生を送りたいと考えている。

健康とゆとり



前・桜川市立
桃山中学校長
枝川 健

退職して早半年を迎えますが、特に健康とゆとりを大切に、多動・多休・多接のある生活に心がけています。季節の移り変わりに自然の営みを感じながら歩く朝夕の散歩、早朝のラジオ体操など、健康な生活習慣が身に付いてきました。庭の小さな花壇で野菜作りも始めました。これまでは「すべきこと」「できること」「したいこと」の

適切な選択を常に考えてきましたが、これからは「したいこと」を大切に過ごしていきたいと思っています。これまで背負ってきた「べき」を遠くから見つめ、腹八分目でものごとを思い描きながら、自分らしさを求めていると考えています。

現在、県西教育事務所の生徒指導相談員をしています。相談者の「今」の困り感を丁寧に受け止め、共に悩み、共に考える姿勢で取り組んでいます。改めて「聴く」ことの大切さを痛感しています。心の安全基地をもてずに不安定な子、他者と折り合いをつけたり適切な距離感で友人関係を保つたりすることが苦手な子が気になります。

一人で悩んで困っている相談者の心を和らげ勇気づけられるような相談を大切に、相談者と学校等をつなぐ架け橋としての役割を担いたいと考えています。

好奇心をもって



前・八千代町立
西豊田小学校長
湯本 春雄

退職して半年。これからは在職中にはできなかったことに挑

戦していきたい。

まず、しばらくできなかったゴルフを再開したい。以前練習場に通っていた頃、何人もの友人ができた。でも未だに一緒にプレーできていない。プレーしたことのない仲間と会話をしながら、楽しく回りたいたいのである。

次に、自分の住んでいる地域の活動に積極的に関わってきたい。今は登下校する小学生や中学生へのあいさつを心がけている。

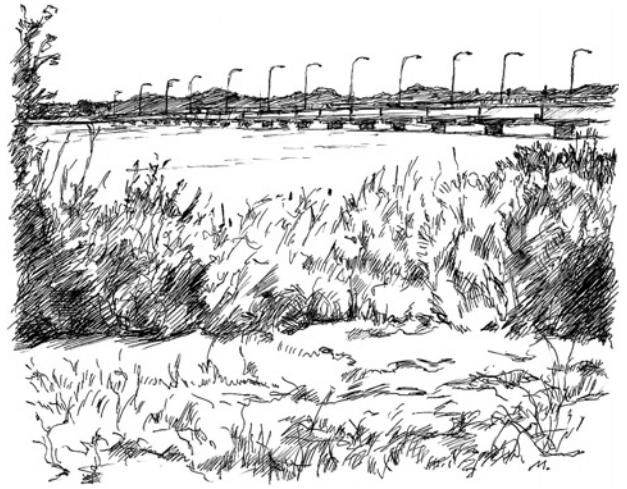
さらに、英語を学び直したい。外国の政治経済や文化について深く、外国の人たちと直接関わったり、諸外国への旅行をしたりしたい。

機会を得られれば東京オリンピックのボランティアもしたいと考え、少しずつ準備を始めていく。

これからも好奇心をかき立てられることにたくさん出会うと思う。小学生の子どもたちのように「なぜ、どうして」の気持ちを忘れず、人生を楽しんでいきたい。



ひばり



「霞ヶ浦大橋を望む」
行方・玉造小 片岡 満

遊び場をみんなで守る

笠間・笠間小
井坂 守

本校には、大きな鉄製のすべり台が五本設置されている。上にある中学校の運動場からの土手が利用され、一番長いものは校舎の三階よりも高い所からすべり降りるくらいの長さだ。

平成二七年度には、中学校からの雨水が直接流れ込んで、土手の一部が削れていた。雑草やシノが伸びてしまい使用できなかった。何とか使用できるようにと、PTAにも相談し、復活させていくことになった。

当時の六年生が、清掃の時間

を利用し、側溝や階段の掘り出しを始めた。高い木の伐採や土手の修復は、保護者の手もお借りした。錆びた鉄を磨き、ペンキ塗りも児童が行った。作業は約五か月続き、卒業を前に完成した。周辺の遊び場を「高台から学校を見守っている場所」ということから「おま森」と命名してくれた。翌年は、六年生の実行委員「おま森レンジャー」によって、遊び方の約束が決められ、看板も設置された。今年も、その思いを引き継ぎ、二代目の「おま森レンジャー」が結成され活動している。

自慢の地域

ひたちなか・那珂湊第一小
米川 博美

研修会で茨城新聞社小田部社長の講演を拝聴した。前半のお話では、東日本大震災直後でありながら、全社一丸となつて新聞を発行し続けたこと。その姿に並々ならぬ意気込みを感じた。後半では「茨城県の魅力度最下位をぶつ飛ばせ」として、県内の子供たちから集めた「茨城の自慢できるところ」の紹介だった。「そうだ、そうだ。我が茨城は魅力があるんだ。誉められると嬉しい。」聴衆の心が一つになり、会場が明るくなつたような気がした。

那珂湊にも自慢がある。まず、資資閣跡。水戸藩の迎賓館だ。現在の湊公園に建っていた大変豪華な建物で、当時那珂川に舟を浮かべ木琴を鑑賞したという。次に、反射炉。幕末、若千一六歳の大工飛田与七が苦勞の末皆と造り上げた。現存しているが間違いない世界遺産だ。さらに藩士・農・商人多くが学んだ水戸藩郷校文武館跡地に建つ那珂湊第一小。
茨城、歴史と伝統・文化の街那珂湊。児童には、自慢の地域を胸に、堂々と歩んでいって欲しいと願っている。

地域に感謝しながら

常陸太田・幸久小
石川 洋治

水田の黄金色の稲穂が重たげに風に揺れ、稲刈り後の温かな稲のにおいが漂っている。自然を感じる時、自分を育ててくれた久慈の自然豊かな環境に感謝の気持ちでいっぱいになる。

子供たちの登下校の見守り活動をしていただいている安全ボランティアの方より、「子供のたちの安全を見守るのはあたりまえ。長い距離を歩いて疲れたときに、一息つきながら子供たちの氣付いた草花や地域のことを話すのが楽しみ。子供たちの感性を育むことにつながれば何より。」というお話をいただいた。「子供たちは地域のたから」という思いを強く感じると共に、健やかな成長への心配りから感激した。

本校では、地域の方々の思いを大切に、郷土愛・地域から愛され、地域を愛する子供たちの育成を目指し、地域素材を生かした体験活動「河合のほうき作り」、交流活動「学校へ泊まろう会」「三世代交流会」などの行事を実践している。
学校の取組が地域の方々の笑顔の源となればありがたい。

「未来を拓く豊かな心」

神栖・太田小
成島 崇文

四年生が四月に種を蒔いたツルレイシがぐんぐん育ち、七月には実を付け、八月には立派なグリーンカーテンとなつて夏の強い日差しを和らげた。
九月に観察記録をつけていた子供たちに尋ねた。

「今年は、去年より育ちが良い
そうだけど何でかな。」
一人の子がにこやかに答えた。
「たくさんの方が愛情をかけたから。」

このツルレイシを育てるために、子供たちの陰で、多くの職員が草取りや間引きなどの世話をしていた。そのことを子供たちは知っていたのだ。

本校は、創立一三三年の歴史を誇る地域との結びつきが深い学校である。地域の方々は、奉仕作業や読み聞かせ、学習ボランティアなど、様々な形で学校を支援し、子供たちに関わってくださっている。地域活動も盛んである。そうした大人たちの善意溢れる後ろ姿を見ながら子供たちは育ってきた。だからこそ、人の関わりを「愛情」という言葉で表現できるのだろう。
未来を拓く子供たちの豊かな心を育むために、私たち大人は、

「百の言葉より一の行動を大切にしなければならぬ」
そう、意を新たにしたら出来事であった。

子供たちの未来

土浦・真鍋小
江原 保子

今朝七時ちよつと前にJアラートが鳴った。登校準備の子供たちや通勤途中、またはすでに学校で仕事を始めていた職員たちは、さぞかし不安な時間を過ごしたと思う。子供たちが登校途中で起こつたらと思うと背筋が寒くなる。

現在の四年生の平均寿命が百五歳前後になると「人生百年会議」のニュースが伝えていた。AI等の台頭で従来の教育や雇用の仕組みが通用しなくなるリスク、超長寿時代の到来等人生設計を大きく転換せざるを得ない不透明な時代がやってくるようだ。そんな時代を生き延びていく子供たちの未来は明るいのだろうか。

「人」という字が示すように、人間は社会を作って生きていく。社会とは司馬遼太郎さんの言葉を借りれば支え合う仕組みであり、その根底には「いたわり」「他人の痛みを感じる」「やさしさ」があるといわれている。

ただし、それらは本能ではない。訓練してそれを身に付けていく必要がある。その訓練の場の一つが「学校」なのだろう。子供たちの生きる社会はそんな根っこがしっかり根付いていてほしい。その未来を頼もしく生きていく子供たちであってほしい。

家庭料理

石岡・南小
櫻井 登代子

「食事はすべてのはじまり。大切なことは、一日、一日、自分自身の心の置き場、心地よい場所に帰ってくる暮らしのリズムをつくること。その要となるのが、食事です。」(料理研究家 土井義晴氏の言葉)

現在、食生活の問題が深刻化しています。子供たちにとって、は、知育・徳育・体育の基盤が食育であると思います。学校で、挨拶を交わす朝の時間に、子供たちの顔色が悪かったり、声が出なかつたりすると、朝ごはんを食べてきたのかと心配になることがあります。教師という立場において、食の大切さを保護者へ呼びかけ、子供たちに指導しています。

さて、私の「食」を振り返りますと、仕事と家庭の両立で、無我夢中の毎日でした。食べた

後に「おいしい」「きれいな色だね」と、感じさせる料理をしていたのかどうか不安です。

これからも、無理をしないで、素材を生かし、旬を味わいながら家庭料理を作っていきたいと思えます。

素晴らしい仲間

古河・古河第三中
櫻村 睦彦

私は、初任者として赴任した中学校の時の学年の先生方と校長先生とで年一回必ず集まり、杯を交わしながら、近況報告や思い出話に浸っている。

その学校は当時県内でも一、二に荒れていた。授業離脱の生徒の対応、対教師暴力の阻止、毎日の家庭訪問など、日々問題行動のある生徒たちとの戦いがあった。しかし、私は、こういう状況の中でも学校が楽しかった。それはこの仲間がいたからである。学年主任は、「先生たちは負けない。」と力強い姿勢を見せ、先輩の先生方は、「生徒全員による演奏会を行おう。」など生徒たちが活躍する場を企画した。紆余曲折はあったが、その取組によって徐々に生徒たちが輝き始めた。今考えれば、素晴らしい教師集団であったと思う。この仲間から学んだこと

が今の私の教師としての原点となっている。
今職員室を見渡し、「支え合い安心して仕事に取り組める学校になっているか」、「若い先生方にとって自分の考えを自由に発言できる雰囲気になっているか」など居心地のよい学校になっているのか自問自答の日々である。

教員としての原風景

結城・城西小
沼田 育男

母親の実家は旧常北町である。教員に採用され、県西の三和町に赴任した。幼少時は母の実家に行くのが楽しみであった。国道五〇号線を笠間から左に入るとまだ舗装されていない山道が続く、土煙が舞い、車の窓は開けられなかった。スリリングな中山峠、正面には薄黄緑色の葉たばこの峰、そして、人の手で掘つたような隧道を潜ると左手に青山小学校が見えてきた。小高い丘に建っていたように記憶している。当時は木造校舎で下界を見下ろし、凜としていた。なぜかこの学校の前を通るといつも背筋がびんとしたのを覚えている。

石塚の街には鉄道が走っていた。小さな駅だったが、電車を

間近で見て感動した。夕方になると街は銭湯やご飯を炊く香りに包まれ、心地がよかつた。

あれから五〇年。道路も景色も大きく変わった。峠も隧道も当時の面影は消え、静かに佇んでいる。線路は道路となり、車が行きかかつていた。

気になっていたあの青山小学校も今は廃校になっていた。過疎化の波の無情さを感じ、鉄道が無くなる以上の寂しさを感じた。教員としての時間があとわずかとなり、過去に勤務した学校のことが気になっている。

編集後記

二学期早々のお忙しい中、たくさんの方々に原稿をお寄せいただき、広報第二三九号を無事発行することができました。

今号は、「特色ある学校経営」、「先輩と語る会」等の特集として掲載させていただいております。皆様のお役に立てば幸いです。貴重な原稿をお寄せいただき、ありがとうございました。また、現役に温かい応援のメッセージをいただきました先輩の皆様へ深く感謝申し上げます。

